三重県埋蔵文化財調査報告194

横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告

－三重県松阪市横地町－

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢平野中南部に位置している松阪市は、櫛田川下流域に立地しています。その櫛田川右岸に拡がる漕代地区では、自然堤防上に集落が形成されています。昔から櫛田川の流路の変化とともに、人びとの生活場所も移り変わっていきました。特に横地町周辺は水害を受けており、居住域としての制約が多くありました。

今回報告いたします横地西ノ垣内遺跡周辺は、現存する微高地の縁辺部にあたり、昔の生活の跡が残されてきた場所とみられていました。今回の調査は県営ほ場整備事業に伴って遺跡が削平される部分について発掘調査したものです。

この漕代地区では平成６年度から続けて発掘調査が実施されてきており、各調査で貴重な発見となる成果が上がっています。私たちは、これらの調査成果をもとに郷土の歴史を明らかにしていかなくてはなりません。ついては、本報告が今後の文化財保護と諸研究の一助となることを願います。

平成１１年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　大井　與生

例　　言

1　本書は、三重県松阪市横地町字西ノ垣内に所在する横地西ノ垣内(よこちにしのがいと)遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2　調査の体制は以下のとおりである。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　技師　大川　操
　　主事　西出　孝
　調査期間　平成10年6月25日～平成10年9月25日

3　本書の執筆・編集は大川　操が行った。

4　発掘調査後の遺物整理は、上記担当者のほか、資料普及グループ職員が補助した。

5　本書で挿図に示す方位は、すべて座標北を用いた。磁針方位は西偏6°20′(平成4年)、真北方位は0°18′である。

6　本文で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。
　SA：柱列、柵　　SB：掘立柱建物　　SD：溝　　SE：井戸
　SK：土坑　　SZ：不明遺構　　Pit：柱穴、小穴

7　写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応させてある。

8　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9　本調査は、三重県教育委員会が、平成10年度県営ほ場整備事業に伴って実施したものである。また、その調査費用は、一部を国庫補助金を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産商工部が負担した。

10　調査にあたっては、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、松阪地方県民局農林商工部、松阪市教育委員会、および地元の方々に協力いただきました。記して謝意を表します。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
　各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… (1)
　1　調査の契機 …… (1)
　2　調査の経過 …… (1)
　3　調査の方法 …… (2)
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… (3)
　1　遺跡の位置 …… (3)
　2　歴史的環境 …… (3)
Ⅲ　基本的層序と遺構 …… (4)
　1　層　序 …… (4)
　2　遺　構 …… (4)
Ⅳ　遺　　物 …… (9)
　1　古墳時代の遺物 …… (9)
　2　奈良時代の遺物 …… (9)
　3　平安時代の遺物 …… (11)
　4　中世の遺物 …… (11)
　5　包含層・その他のピット出土遺物 …… (11)
Ⅴ　結　　語 …… (13)
　1　製塩土器について …… (13)
　2　集落の推移 …… (13)

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… (2)
第２図　調査区周辺地形図 …… (3)
第３図　上層遺構平面図 …… (6)
第４図　下層遺構平面図・土層断面図 …… (7)
第５図　SK30・SK10・SK15・SK13・SK18実測図 …… (8)
第６図　出土遺物実測図(1) …… (10)
第７図　出土遺物実測図(2) …… (12)

表　目　次

第１表　遺構一覧表 …… (14)
第２表　掘立柱建物等一覧表 …… (14)
第３表　出土遺物観察表 …… (15)

図　版　目　次

ＰＬ１　上：上層　調査区全景　　下：下層　調査区全景 …… (17)
ＰＬ２　左上から：SK30　SB37・38　SK15　SK13
　　右上から：SD40　SK10　SE16　SK11 …… (18)
ＰＬ３　出土遺物（１） …… (19)
ＰＬ４　出土遺物（２） …… (20)
ＰＬ５　出土遺物（３） …… (21)

Ⅰ．前　　言

1　調査の契機

横地西ノ垣内遺跡は、三重県松阪市横地町字西ノ垣内に所在する。当遺跡は、櫛田川右岸の自然堤防上にある。現況は水田であり、その中に集落が点在する。

平成10年度の県営ほ場整備事業で遺跡が壊される可能性があった。そこで平成10年３月に試掘調査を行った。その結果、柱穴のほか川原石が入った甕、及び奈良時代や中世の遺物を確認した。そこで、三重県埋蔵文化財センターでは、松阪地方県民局農林商工部と遺跡保存の協議を行い、遺跡が削平される部分について本調査を実施することとした。

調査は、遺跡面積約1,500㎡のうちの当該事業で削平される約1,200㎡を対象とした。調査期間は、平成10年６月25日から９月25日までである。

2　調査の経過

（1）調査経過概要

調査区は、標高約13.2mの畑地で、周囲は水田としてすでに0.4m程削平されている。調査区は、道路となる幅5mの部分を挟んで、堤防側の約1,100㎡と東側の約100㎡に分断されている。試掘調査の結果から、上下２面の遺構がみられる可能性が指摘されていた。そこで、上層遺構の記録が終了後、さらに重機で下層の包含層（包含層Ⅱ)を掘削し、遺構検出以降を人力によって掘削した。ただし、上層調査で遺物の出土の多かった一部については包含層掘削も人力で行った。

作業に参加していただいたのは、横地町、目田町、法田町在住の方々である。お名前を記して感謝いたします。

岩田修、奥田松代、橘とし子、辻　妙子、楠木和江、橘とみ、永崎幸美、中村みちよ、脇田房子、中村せい子、中西美奈子、奥井久雄、中井春男、中井稔子、田所きぬ子、前田きみ子、中野榮美、岡山富美子、高瀬美千子、

（2）調査作業日誌（抄）

1998年

6月25日　重機による表土掘削開始。
6月26日　重機による表土掘削続行。
7月 1日　道具搬入及び地区設定。
7月 6日　上層掘削作業開始。
7月22日　ＳＫ10で土師器皿、灰釉陶器椀等出土。
7月30日　上層遺構掘削終了、写真。
7月31日　上層遺構平面実測。
8月 6日　下層調査開始。人力包含層掘削開始。
8月 7日　重機による層掘削開始。上層で確認の土坑18の石組みが包含層Ⅱ除去後も検出され円形を呈す。
8月12日　調査区を東西に横断するＳＤ06を検出。
8月17日　SB25の柱掘形から土師器甕片等が出土。
8月24日　土坑18をＳＥとして掘削。ＳＫ30土師器出土状況実測写真。
9月 4日　下層遺構掘削完了、写真。
9月 8日　下層遺構平面実測。
9月17日　遺構個別写真。
9月22日　台風7号上陸により現場プレハブ倒壊
9月23日～25日　プレハブ解体・撤収。現場道具の撤収。

1999年

3月 8日　地元住民対象に、古轡通りＢ遺跡と西ノ垣内遺跡合同のスライド上映会開催。

（3）文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成10年６月30日付け、農基第78－3号(県知事通知)
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成10年６月25日付け、教生第533号(県教育長通知)
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(松阪警察署長あて)
平成10年10月27日付け、教生第8－25号(県教育長通知)

3　調査の方法

（1）掘削について

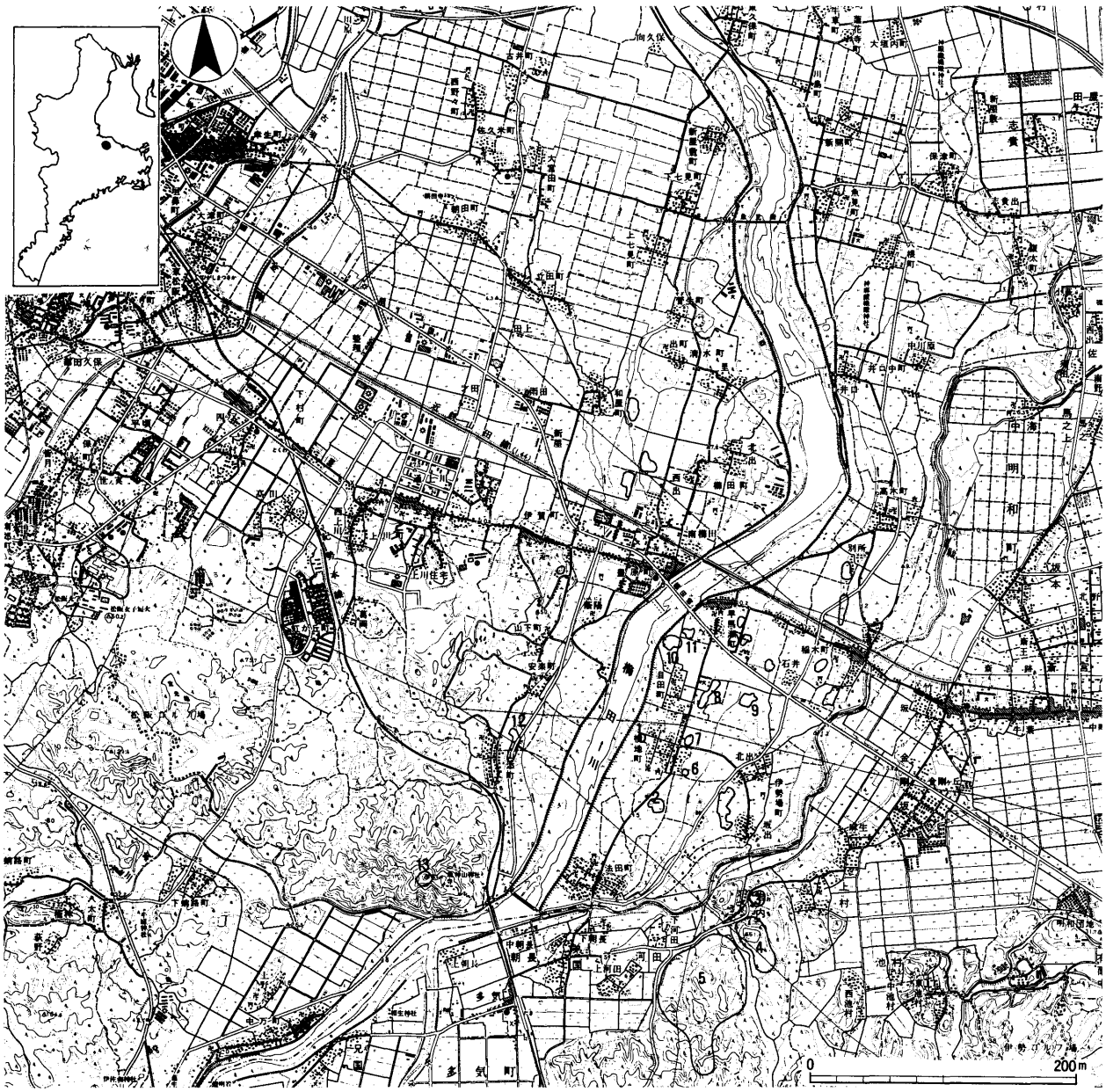
当遺跡では、試掘調査の結果から、中世以降の上層と、奈良時代の下層の２面が確認されていた。調査期間の制約から、厚さ約30cmの耕作土と下層の遺物の包含の少ない部分については、重機による掘削を行った。下層のうち部分的には、人力による包含層掘削を行った。下層の包含層の厚みは東側ほど厚く、40～50cmであり、西側ほど約15cmと薄い。

（2）地区設定について

調査地区の設定は、道路計画線を基準軸として４m四方の升目で区切り、南北にアルファベットでA～N、東西に数字を１～１０とつけ、枡目北西隅の交点を地区名とした。なお、この方眼は国土座標とは無関係に設定をしたものである。

（3）遺構図面について

調査区の平面図及び土層断面図は、上・下層とも縮尺1/20で手書きした。また、出土遺物を伴った遺構については、縮尺1/５または1/10で出土状況図を作成した。



第１図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院「松阪」（１：25,000）より）

II．位置と歴史的環境

1　遺跡の位置

横地西ノ垣内遺跡(1)は、三重県松阪市横地町字西ノ垣内に所在する。

松阪市南部をほぼ東流する櫛田川は、祓川と分流する辺りからその両側に広く沖積平野を形成しており、かつてその本流であったされる祓川とともに氾濫を繰り返していたと考えられる。

櫛田川右岸のこの漕代地区では、自然堤防が形成されており、祓川との分岐点である法田町から横地町、目田町から早馬瀬町を経て稲木町にかけて、その自然堤防上に集落が存在する。

2　歴史的環境

この櫛田川から祓川の間には、古墳時代から中世にかけての遺跡が集中している。古墳は祓川右岸の段丘上に集中し、南から順に400基以上の横穴式石室をもつ河田古墳群(5)、大塚古墳群(4)、神前山古墳（3)などが築造されている。また昨年の横地高畑遺跡(2)でも方形の古墳が検出されており[1]、祓川から櫛田川間の微高地部にも古墳が築造されていたことが判明している。

また古代から中世にかけてはこの自然堤防上にかなり集中して遺跡が分布する。中世の集落跡とみられる古川遺跡(9)[2]、石組みの井戸や暗渠施設などが多く検出された中の坊遺跡(8)[3]、さらに中世の遺物の散布が多くみられる目田山遺跡(6)、大正寺遺跡(7)、古轡通りA(10)・B(11)などでも山茶椀などの日用雑器が採集されている。

櫛田川の対岸にも、同時代の生活の痕跡が窺われる山添遺跡(12)があり、掘立柱建物やこれに伴う石組みの井戸などが検出されている[4]。

さらに、この南側の標高約131mの神山には、神山城跡(13)[5]があり、北畠氏配下の潮田氏の居城と伝えられている[6]。

第２図　調査区周辺地形図（１：5,000）

Ⅲ．基本層序と遺構

1　層　序

調査区の上層の基盤は、標高約12.4mで基本的に淡黄褐色の粘質土である。調査区の南端では暗褐色の砂礫層がみられる。

下層の基盤は、標高約12.2mで黄橙褐色の粘質土である。上層と同じく南端のみ暗褐色の礫層となる。以下、基本的な層序を記述する。

第１層：暗褐色土　　表　土
第２層：黄褐色土　　包含層Ⅰ
第３層：オリーブ褐色土　包含層Ⅱ
第４層：明黄褐色粘質土　地　山

2　遺　構

奈良時代から鎌倉・室町時代までの遺構を確認した。しかし、上層の調査区北部では、耕作時の溝が遺構面に達するところが多く、一部を破壊された遺構もあり、時期決定し難いものがあった。
以下、遺構ごとに概述する。

（1）奈良時代の遺構

ＳＫ30　調査区中央やや西寄りで検出した長楕円形の土坑である。西端を試掘坑No.2で掘削されており、この土坑上面からも多くの遺物が出土している。

土師器の杯や皿片のほか、竈・甑・長胴甕・高杯が出土した。

ＳＫ36　調査区東端中央で西半分を検出した、残存の深さ約５cmの浅い土坑である。

土師器の杯片がわずかに出土した。

ＳＫ44　調査区南東部で検出した長楕円形の土坑で、中央を試掘坑No.4で掘削されている。残存の深さ約５cm、長径約4.7m×短径約1.4mである。

土師器の杯片や高杯・鍋把手・甕片が出土した。

ＳＤ40　調査区南東部を北東から南西に向けて緩やかに南流する幅約1.8mの溝で、南半では南北にやや氾濫した痕跡が認められた。東の拡張区で溝の延長は検出されなかったので、調査区間の５mの間で止まるか、あるいは北へ大きく湾曲するものと考えられる。

出土遺物は、土師器の杯片や皿片・甕口縁・長胴甕片・鍋把手・高杯片、須恵器の短頸壺や土錘、鉄滓が出土した。

ＳＤ42　調査区東南部で検出した、先述の溝ＳＤ40に平行する溝であるが、ＳＫ43以南は検出されなかった。

出土した土師器の皿底部には、「×」の線刻がみられるものもある。

（2）平安時代の遺構

ＳＢ24　調査区西端で確認した東西棟建物で、桁行２間以上×梁行２間の側柱建物である。Ｅ22°Ｓの棟方向をとる。柱掘形は50cm～60cmの方形で、柱痕跡は径20cm～25cmである。ＳＢ27に先行する。

柱掘形から緑釉陶器片が出土した。

ＳＢ25　調査区やや東寄りのところで検出した南北棟建物で、桁行５間×梁行２間の側柱建物である。

柱間は桁行・梁行とも不揃いである。Ｅ24°Ｓの棟方向をとり、ＳＢ24の棟通りに北側の妻をほぼ直交させて建つもので、さらにこの北側約5.5mに東西方向の柱列を伴うものとみられる。

ＳＡ23　ＳＢ25の北側に面して東西に延びる柱列で、ＳＢ25の北側の妻に面して設置されており、この建物に伴う施設と考えられる。柱間はやや不揃いであるものの約2.5mである。

ＳＢ29　ＳＢ28に先行して建つ桁行３間×梁行２間の南北棟の側柱建物である。柱間は桁行1.9m×梁行1.6m、棟方向はＮ20°Ｅである。

南東隅の柱掘形から緑釉陶器瓶類の体部破片が出土している。

ＳＢ31　調査区西壁面際で東側柱筋のみを検出した南北棟とみられる桁行３間以上の建物で、柱掘形・柱痕跡とも焼土のブロックが含まれている。柱間は桁行約2.2m、棟方向はＮ28°Ｅである。

ＳＢ37　調査区中央で検出した東西棟の側柱建物で、桁行４間×梁行２間である。棟方向はＥ43°Ｓ、柱間は桁行1.9m×梁行2.0mである。柱掘形は50cm前後の方形で、柱痕跡は径約20cmである。ＳＢ31同様、

柱掘形の大半に焼土のブロックが認められたものである。

ＳＢ38　ＳＢ37の西側に建つ桁行３間×梁行２間の東西棟で棟方向はＮ45°Ｗをとる側柱建物である。

柱間は桁行1.7m×梁行2.0mであるが、南側柱筋は柱間が不揃いである。柱痕跡は径約30cmであり、柱掘形は60～70cmの方形で、大半が炭を多く含んでいた。

ＳＫ26　調査区西端で検出した三角形の土坑で、残存する深さは約５cmである。

土師器の杯・甕、須恵器の杯や甕等の破片のほか、製塩土器片、鉄滓などが出土した。

ＳＫ34　調査区中央やや東寄りで検出した、不整形で残存する深さが約８cmの土坑である。

土師器の杯や甕の破片、須恵器の杯片のほか、土錘なども出土した。

ＳＫ33　調査区中央で検出した楕円形の土坑で、長径1.8m×短径1.1m、残存する深さは約12cmである。

土師器の長胴甕片、土錘、鉄滓が出土した。

ＳＫ39　調査区中央やや南寄りで検出した径約2.8m、残存する深さが約30cmの土坑である。

土師器の杯や甕、須恵器の甕の破片が出土した。

ＳＫ43　調査区やや南よりで検出した径約2.8mの円形土坑と思われるが、西半を後出のＳＥ16や、ＳＫ14に掘削される。残存する深さは約10cmである。

土師器の杯や甕、須恵器の甕口縁部破片などが出土した。

ＳＫ22　調査区北部中央で検出した径約1.1mの円形の土坑で、残存する深さは約15cmである。擂鉢状に落ち込むもので、埋土に焼土と炭を含む。

出土遺物の大半を製塩土器が占め、製塩土器は３個体以上あるものと考えられる。

ＳＫ35　調査区中央で検出した、長楕円形の土坑である。長径約6.0m×短径約2.0mの規模で、残存する深さは約15cmである。

土師器の杯や甕・竈片、土錘が出土した。

ＳＫ14　調査区南東部で検出した土坑で、ＳＥ16に先行する。残存する深さは約３cmと浅い。

土師器の杯・甕片が出土した。

ＳＫ11　調査区中央やや西寄りで検出した不整形の土坑で、残存する深さは約15cmである。

土師器の皿・甕、ロクロ土師器の小皿、山茶椀等の破片と土錘・鉄滓が出土した。

ＳＫ10　調査区中央やや東寄りで検出した円形の土坑である。

土師器の甕口縁部、ロクロ土師器の小皿、山茶椀の口縁部が良好な状態で出土した。

ＳＫ12　先述のＳＫ11の南側で検出した不整形土坑で、残存する深さは約５cmの浅い土坑である。

土師器の皿、ロクロ土師器の小皿、須恵器の甕等の破片が出土した。

（３）鎌倉・室町時代の遺構

ＳＢ03　調査区北西隅で検出した桁行４間×梁行２間の東西棟の側柱建物建物で、Ｅ7°Ｓの棟方向をとる。東妻柱の延長に約２m隔てて同方向の柱列ＳＡ04を伴う。ＳＢ03の柱間は不揃いで、桁行は1.9～2.0m、梁行は1.6m＋1.9mである。

ＳＡ04　ＳＢ03に伴うと考えられる柱列で、東西４間である。柱間はやや不揃いであるものの、約2.5mであるとみられる。

ＳＢ27　調査区西端に建つ建物で、桁行２間×梁行２間の東西棟の側柱建物である。柱掘形は60～70cmの方形、柱痕跡は径約20～30cmで、棟方向はＥ20°Ｓである。ＳＢ24の方が先行する。

ＳＢ28　同じく調査区の西端に建つ、桁行３間×梁行２間の南北棟の側柱建物である。柱間は桁行が約2.0m、梁行は不揃いで2.0m＋1.5mである。

棟方向はＮ28°Ｅを示す。

ＳＤ05　調査区北部東端で長さ約4.5mを検出した、幅約40cmの東西溝である。残存する深さ約25cmで、緩やかに東へ下がる勾配をとる。

土師器の皿・鍋・甕片、鉄滓が出土した。

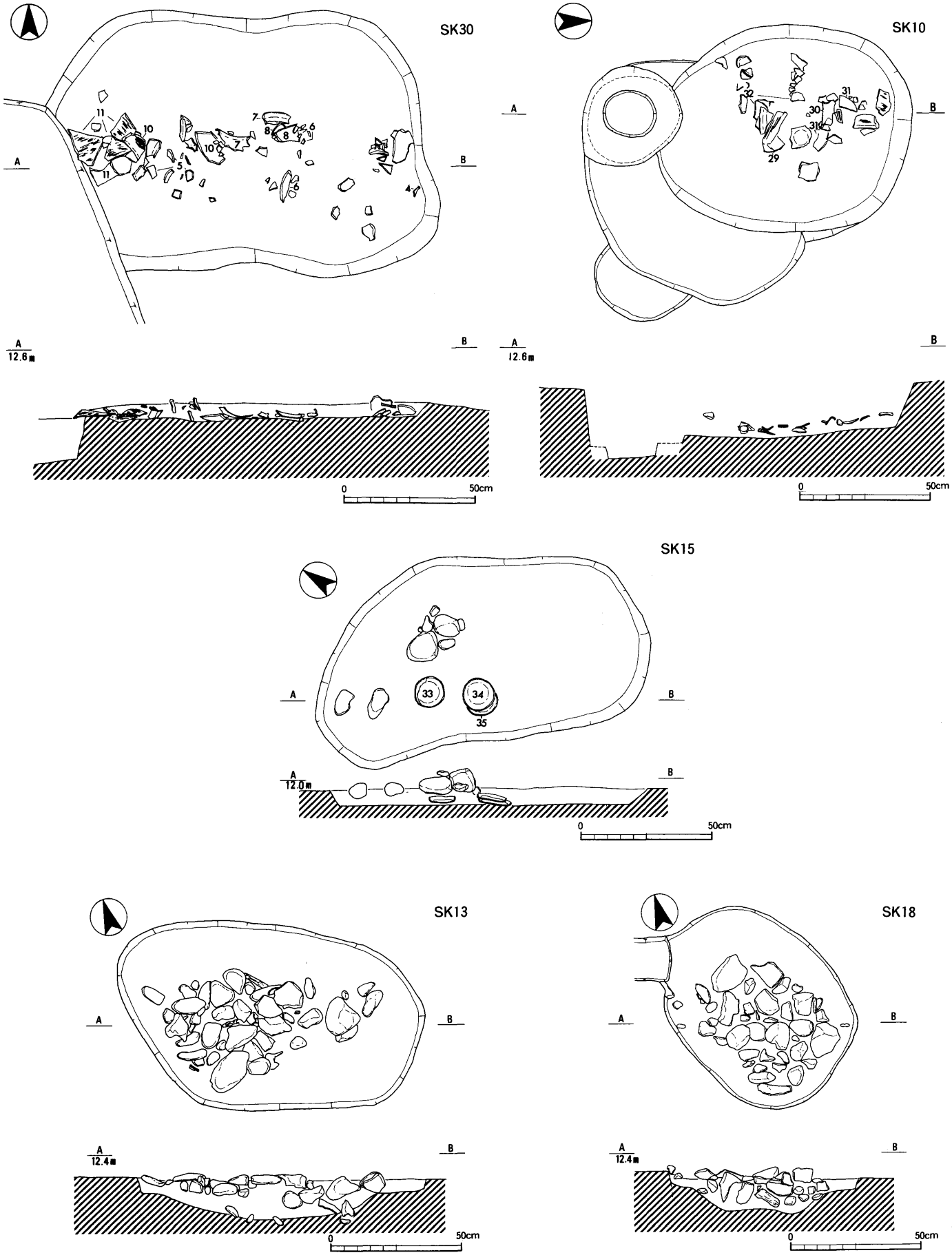
ＳＥ16　調査区南部で検出した、掘形径約2.5mの内側に径約1.5mの石組みをもつ井戸である。石組みはかなり崩落がみられ、大きさにかなり大小差があった。深さ約1.0mまで掘削をしたが、降雨季で雨天のために再三の崩落があり、作業に危険を伴ったため掘削を中止した。

土師器の鍋・羽釜の破片等がわずかに出土した。

ＳＫ19　試掘坑No.4の西端で確認していた、礫が入った土師器の甕体部下半が出土した。

第３図　上層遺構平面図（１：200）

第４図　下層遺構平面図（１：200）



第5図　SK30・SK10・SK15・SK13・SK18　実測図（1：20）

口縁部は残存しておらず、礫の入った甕以外に、土師器の皿口縁、鍋片がわずかに出土した。用途や性格は不明である。

ＳＤ01・02　調査区北端で検出した長さ約3.6mの東西溝で、約40cmの間をおいて２条が平行する。

残存する深さは約25cmで、２条ともほぼ同じである。

土師器片、鍋片とともに青磁片が出土した。

ＳＫ13　調査区南端で検出した長径約1.1m×短径約0.7mの土坑で、人頭大の礫が集石されていた。

わずかに土師器の皿片、羽釜の鍔片、山茶椀片が出土した。

ＳＫ18　先述の土坑ＳＫ13と同じような集石がみられた土坑で、径が約0.8mと略円形である。

わずかな土師器片を伴ったのみである。

ＳＤ06　調査区北部を横断する幅約40cmの東西方向の溝で、東下がりの勾配をもつ。

土師器の皿片、鍋片が出土した。

ＳＤ07　先述の溝ＳＤ06に先行する溝で、ＳＤ06とほぼ同じ地点から発し、ＳＤ06に重複しながら西端から約9.0mのところで南折し、調査区中央付近でとまるものである。

土師器の皿・甕の破片が出土した。

ＳＤ08・09　ＳＤ08は、先述のＳＤ06と約50cmを隔てて南の地点に平行し、西端から約5.0mのところで南折し、約5.5mのところでとまる溝である。

またＳＤ09はＳＤ08と対称的に調査区東端から発し、約8.5m地点で同じく南折し、約2.0mでとまる。

ＳＤ08とＳＤ09間は約8.0mで、ＳＤ08以西とＳＤ09以東に区画割の役割をもたせた溝ではないかと考えられる。調査区内では、この溝に伴う掘立柱建物等の施設は確認できなかった。

ＳＤ20・21　いずれも東側の拡張区で検出した南北溝で、ＳＤ20は拡張区全域にわたる約28m、ＳＤ21は拡張区南端から約15mを確認した。２条の溝はほぼ平行して延びているが、溝間は約60cmと道路とするにはやや狭いため、若干の時期差をもって掘削されたと思われる。

ＳＤ47　調査区南西端の台地縁辺に沿って延びる溝である。西端は撹乱土坑のために詳細が不明であるが、西端から約17m地点で直角に南折する。幅は約60cmで、東へ向けて勾配をとる。

ロクロ土師器の皿、底部破片や山茶椀の破片等が出土した。

Ⅳ．遺　　物

出土遺物は、すべて拡張区以外の調査区からの出土のものである。拡張区は遺構も乏しかったが、遺物の出土量としても微量であった。出土遺物は整理箱で約55箱である。

本調査区の出土遺物も、残存状況が悪く、器壁が磨滅するものが多い。以下、遺構出土の遺物を中心に概述する。

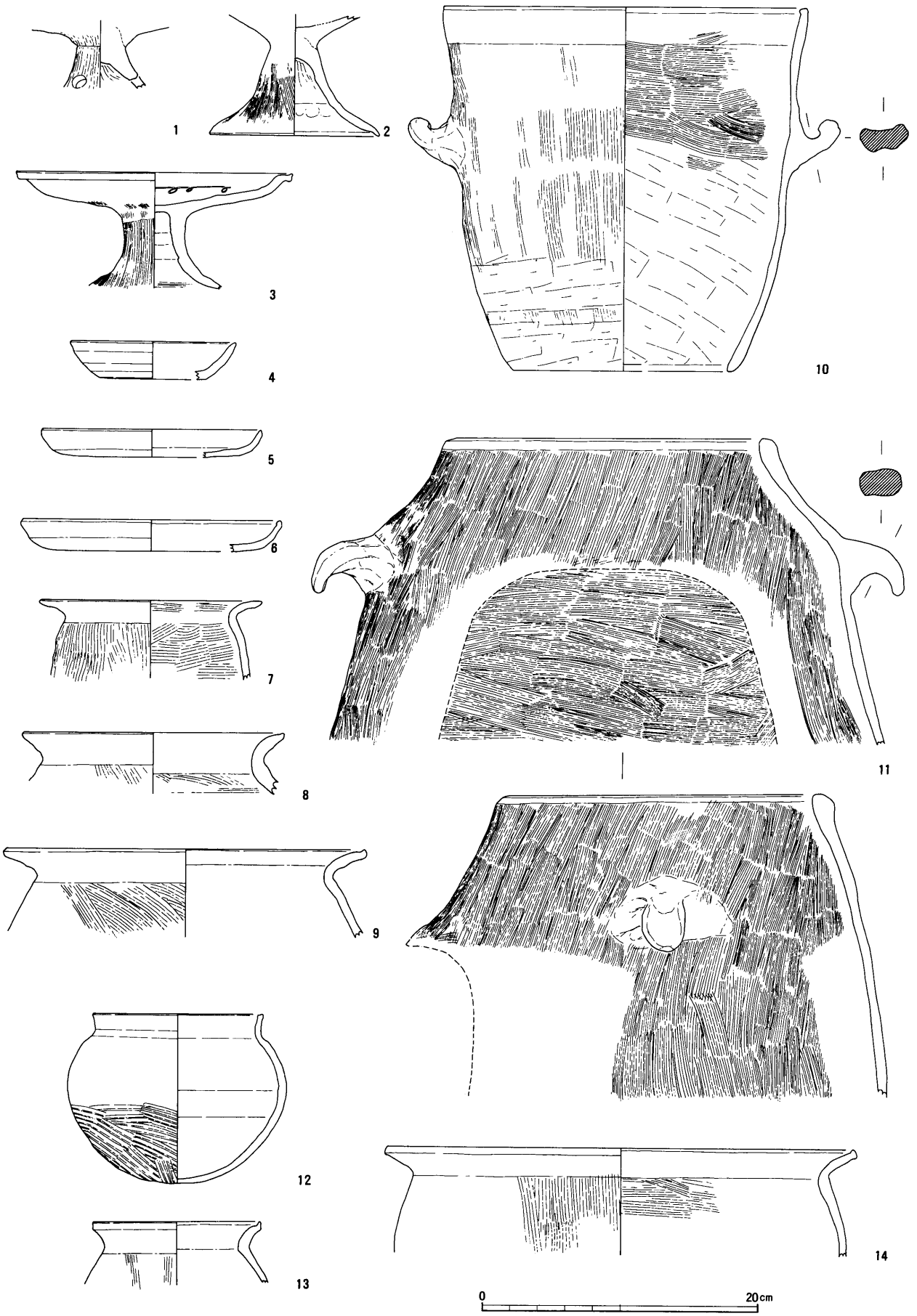
1　古墳時代の遺物

土師器高杯(1・2)　(1)は杯部内面が剝離する。脚部外面にわずかにミガキの痕跡、内面にシボリ痕がみられる。(2)は脚部外面に細かいハケメ、内面に弱いシボリ痕がみられる。透かしはないものと思われる。いずれもピットからの出土であるが混入であろう。

2　奈良時代の遺物

ＳＫ44出土遺物(3)　土師器高杯で脚端部を極わずかに欠損する。杯部内面に部分的ではあるが螺旋暗文1段がみられる。脚部外面は弱い面取をしたうえで細かいハケメにより調整される。(3)のほか土師器の鍋把手、須恵器の長頸壺細片が出土した。

ＳＫ30出土遺物(4～11)　(4)はこの土坑の中で　は数少ない須恵器の杯である。(5・6)の土師器の皿は器壁の残存状況が悪く、調整が不明瞭である。(7・8)は土師器の甕で、外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施される。(9)は土師器の長胴甕で、外面のみに縦方向のハケメがみられる。(10)の土師器甑は、底部からやや外反気味に立ち上がるバケツ状のものである。外面の縦方向のハケメは不明瞭で部分的に残存する。外面下半を横方向のケズリ、



第６図　出土遺物実測図(1)（１：４）

内面は上半を横方向のハケメ、把手貼付け部以下を斜め上方へ向けてのケズリで調整する。外面にススが付着する箇所がみられる。(11)の土師器の移動式竈は、裾・庇端部と左袖を欠損する。外面には縦方向の、内面には横方向の細かいハケメで調整され、把手は貼付けにより接着されている。上端口径は約2/3残存するが、やや楕円形である。

ＳＤ40出土遺物（12～14） (12)の須恵器の壺が検出面直下でほぼ完形で出土したほかは、砂礫層の中から細片で出土したものであり、残存状況も悪い。(12)の須恵器の壺はひずみが大きく、口縁は楕円形である。(13)の土師器の甕は口縁端部が真っ直ぐ上方に立ち上がるもので、器壁の残存状況が悪く、外面にわずかに縦方向のハケメが確認できるのみである。(14)の土師器の長胴甕も器壁の残存状況が悪く、外面の縦方向のハケメ、内面の横方向のハケメがわずかにみられるのみである。

3　平安時代の遺物

ＳＫ22出土遺物(15～18) (15)の土師器杯は口縁端部をヨコナデ、外面をオサエ後にナデ、内面ナデで調整されており[7]、同手法の杯片多数とともに志摩式製塩土器片が炭片とわずかな焼土とともに出土した。(16～18)の志摩式製塩土器は残存状況が良好で、この３個体以外は小片である。(16・17)は口径15～16cm、器高4～5cmで内外面ともオサエ後に粗いナデ調整する。(18)は、ほかの２個体に比べて口径18.0cmとやや大きい。外面は同じくオサエ後にナデ調整されるが、内面には目の粗い工具によるナデの痕跡がみられる。

掘立柱建物・柱列出土遺物(19～28) 掘立柱建物・柱列の柱掘形から出土したものである。

(19～21)はＳＢ29から出土したもので、(19)は緑釉陶器瓶類の体部破片と思われる。外面には密にヘラミガキが施されている。(20・21)はロクロ土師器の小皿で、底部には糸切りの痕跡を残す。

(22)はＳＢ24の出土で、緑釉陶器であるが、器種は細片のため不明である。平滑な面と側面にのみ施釉がみられる。

(23)の灰釉陶器の長頸壺は口縁端部を欠損するが、以下は反転復元できる残存状況である。ＳＡ23のピットに横向きで出土したものである。外面から頸部内面にかけて施釉されている。

(24～25)の土師器の甕類は、ＳＢ25の北西隅の柱掘形で出土したものである。いずれも体部外面にのみ縦方向のハケメが施される。

(27)はＳＡ48の柱穴から出土した砥石で、端部に径4mmの穿孔がみられる。一辺約1.5cm　の四面体の形状をしており、四面とも擦痕が認められるが、正面と背面は平滑な、両側面にはやや凹面である。石材のきめは細かく、仕上げ用の砥石かと思われる。

(28)はＳＢ28出土の陶器椀で、内面に硯として転用された擦痕が認められる。

ＳＫ10出土土器(29～32) 土坑底部で20cm大の石とともに出土した、土師器の甕片やロクロ土師器の小皿片などである。(29)の土師器の皿は口縁端部のみをヨコナデし、外面をオサエ後にナデ、内面をナデ調整する。(30)の土師器の甕は残存状況が悪く、調整が不明瞭である。(31)陶器椀は口縁は全周するものの、底部を欠損する。(32)はロクロ土師器の椀で、高台を欠損する。

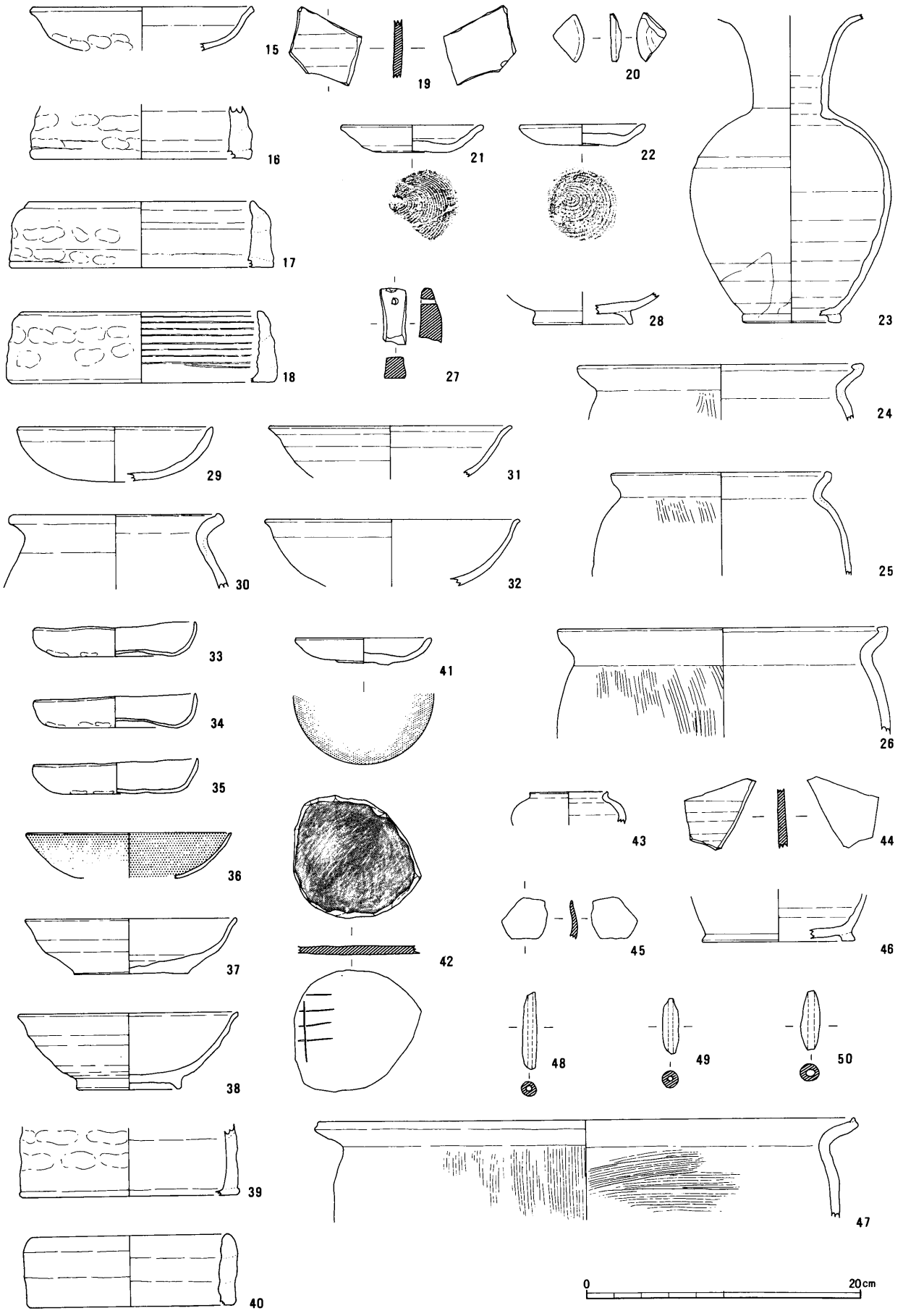
4　中世の遺物

ＳＫ15出土遺物(33～35) 不整形の土坑内で、拳大の石とともに出土した。3個体の皿が完形で、さらに(34)と(35)が上下に重なっていた。いずれもオサエ後にナデ調整するものである。口縁端部はかなりひずみを生じている。

5　包含層・その他のピット出土遺物

(36)はピット出土の黒色土器であるが、器壁がかなり磨滅している。(37)は包含層出土のロクロ土師器皿でほぼ完形に復元できる。胎土には砂粒を多く含む。(38)はピット出土の陶器椀の転用硯である。

椀の底部内面に擦痕があり、口縁部付近まで墨痕がみられる。(39・40)は調査区北西隅の包含層とピットから出土した志摩式製塩土器である。内外面をオサエ後にナデ調整しており、胎土に砂粒を多く含む。(41)はロクロ土師器小皿で、口縁外面に朱と思われる顔料の付着が認められる。器壁の残存状況が悪いため、付着範囲も部分的である。(42)は土師器の杯あるいは皿の底部で、内面にはススの付着痕跡が、



第７図　出土遺物実測図(2)（１：４）

外面にはヘラ状工具による記号の線刻がある。(43)は包含層出土の須恵器のミニチュア短頸壺である。口縁部がわずかに残存するのみであるが、内外面ともロクロナデで丁寧に調整される。(44～46)はいずれも包含層出土の緑釉陶器である。(44))は瓶類の体部で、(46)は高台部と思われる。いずれも外面には丁寧なミガキ調整がみられ、極めて薄く施釉が認められる。(45)は椀類の口縁部かとみられるが、釉・器壁とも剝離が著しい。(47)も包含層出土の土師器の長胴甕である。内外面とも器壁の残存状況が悪く、外面の縦方向のハケメ、内面の横方向のハケメとも部分的にしか確認できない。(48～50)は包含層出土の土錘である。いずれもやや中膨らみで、細身の管状土錘である。

Ⅴ．結　　語

当遺跡は、これまで中世の集落跡として認識されていたが、今回の発掘調査を行ったことで中世以前の奈良時代から平安時代にかけての遺構を確認することができた。以下に集落の変遷を追ってみたい。

1　製塩土器について

志摩式製塩土器とされるこの土器が本調査地の土坑で多数出土した。中には約1/2個体に復元可能なものも含まれており、破片共々２次焼成の赤変がみられる。先述の中の坊遺跡でも比較的多量の製塩土器が報告されている。これらは、櫛田川水運を利用しての搬入の可能性が考えられるとされている。当時の川筋が現在に近い位置にあったとすれば、その搬入にあたっての経路上に当該地があったことも十分に考えられる。

2　集落の推移

古墳時代の遺物は、散見されるが、出土点数も少なく、遺構を確認するに至っていない。したがって、櫛田川の氾濫時に流れ込んだものと思われる。

ＳＫ30にみられる土師器煮炊き具を中心とする遺物の出土は、周辺地における奈良時代の人々の生活痕を物語る遺構であるが、直接住居などの構造物は確認できていない。同時期と思われる溝ＳＤ40等が集落の幹線的役割の溝であろうと思われる。当遺跡は、自然堤防上でも櫛田川寄りに張り出した部分の縁辺にあたるため、幾度も氾濫に見舞われたであろうと思われ、集落本体部分は東側の自然堤防としてより安定した地域に展開されていたと考えられる。

平安時代以降は、比較的連綿と掘立柱建物等の遺構がみられる。平安時代前期のＳＡ23・ＳＢ24・25という比較的正方位に近い棟方向で建つ建物がみられた後、ＳＡ32を伴ったと思われるＳＢ31やＳＢ27・28という一連の建物は出現する。この後平安時代中頃には、多量の製塩土器が投棄された土坑が検出されたことにより、これに伴った可能性が考えられるＳＢ28・29の性格が推測される。ただ、これらの建物は柱穴から緑釉陶器や転用硯が出土するなど、集落という性格のものとはやや異なるものと見受けられる。

平安時代末期から中世にかけては、掘立柱建物としては検出数が少ないが、礫や炭が投棄された土坑や石組みの井戸といった遺構の出現から、奈良時代には東へ控えていた集落の中心をより川寄りに移したものとみられる。

いずれの時代も当該地が自然堤防上であったことは明白であるが、幾度かは氾濫を受け、その度ごとにわずかに集落の中心を移していったことが窺われる。古川遺跡、中の坊遺跡周辺に拠点的な集落を置きながらも、自然堤防縁辺にあたる当該調査地周辺にも分村的な集落を設けていたものと思われる。

［註］

(1)中川　明他「横地高畑遺跡発掘調査報告」　三重県埋蔵文化財センター　1998年
(2)伊藤裕之「古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告書」　三重県埋蔵文化財センター　1996年
(3)伊藤裕之「中の坊遺跡発掘調査報告書」　三重県埋蔵文化財センター　1997年
(4)新田　洋「山添遺跡発掘調査報告書」　三重県教育委員会　1979年
(5)「三重の中世城館」　三重県教育委員会　1977年
(6)「三重県の地名」『日本歴史体系24』　平凡社　1983年
(7)「斎宮跡の土師器」『史跡斎宮跡発掘調査概報』　三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所1985年

遺構略号	遺構番号	地区	時期	特徴・形状など
溝7	SD01	B5	鎌倉時代	SD02と同規模で約0.5mを隔てて平行する
溝8	SD02	B5	鎌倉時代	
	SB03		鎌倉時代	東西棟建物,SA04を伴う
	SA04		鎌倉時代	SB03の棟筋延長に揃えて東西に延びる
溝37	SD05	C7	鎌倉時代	
溝33	SD06	C2～D7	鎌倉時代	
溝35	SD07	C2～H4	鎌倉時代	SD06に先行し、南折する
溝32	SD08	C2～E3	鎌倉時代	SD09に対応するか? 南折する
溝36	SD09	D6～D7	鎌倉時代	
土坑12	SK10	G3	平安時代末期	
土坑5	SK11	H2～H3	平安時代末期	鉄滓・製塩土器・土錘等が出土
土坑17	SK12	H2～I2	鎌倉時代	
土坑10	SK13	L3	鎌倉時代	人頭大の集石土坑
土坑55	SK14	L4	平安時代末期	
土坑16	SK15	K4～K5	鎌倉時代	土師器完形皿3枚出土
土坑18	SE16	K6	鎌倉時代	石組み井戸
土坑54	SK17	H2～H3	平安時代後期	
土坑11	SK18	M4	時期不明	人頭大の集石土坑
土坑20	SK19	K6	鎌倉時代	人頭大の石が入った甕出土
溝44	SD20	G9～N10	鎌倉時代	SD21と平行する南北溝
溝45	SD21	K10～N10	鎌倉時代	SD20と平行する南北溝
土坑22	SK22	D6	平安時代中期	製塩土器片多数出土
	SA23	D6～D7	平安時代前期	
	SB24		平安時代前期	
	SB25		平安時代前期	
土坑29	SK26	E2	平安時代前期	鉄滓・製塩土器等が出土
	SB27		平安時代後期	
	SB28		平安時代中～後期	
	SB29		平安時代中～後期	
土坑35	SK30	F3・G3	奈良時代後期	
	SB31		平安時代前期	
	SA32		平安時代前期	
土坑33	SK33	F4	平安時代前期	土錘出土
土坑32	SK34	F6	平安時代前期	土錘出土
土坑42	SK35	G6	平安時代前期	土錘出土
土坑41	SK36	G7	平安時代前期	
	SB37		平安時代前期	
	SB38		平安時代前期	
土坑49	SK39	J5	平安時代前期	
溝42・48・52	SD40	K5	平安時代初期	土錘出土
溝46	SD41	J7	奈良時代	
溝50	SD42	K7	奈良時代	土師器皿底部外面に「×」線刻
土坑52	SK43	K6	平安時代初期	
土坑53	SK44	K7～L7	奈良時代	
溝51	SK45	L5	奈良時代後期	鉄滓出土
溝56・57	SD46	L7	平安時代初期	
溝47	SD47	K2	鎌倉時代	

第1表　遺構一覧表

遺構番号	規模	棟方向	桁行（m）	梁行（m）	柱間寸法（m）		時期	備考
					桁行	梁行		
SB03	4×2	E 7° S	8.0	3.4	不揃	1.7	鎌倉時代	
SA04	4	E 1° S	9.6	－	2.4	－	鎌倉時代	
SA23	3	E 24° S	8.4	－	2.8	－	平安時代前期	
SB24	(2)×2	E 22° S	(4.4)	4.2	2.2	2.1	平安時代前期	
SB25	5×2	E 24° S	10.0	4.8	不揃	不揃	平安時代前期	
SB27	2×2	E 20° S	5.2	4.8	2.6	2.4	平安時代後期	
SB28	3×2	N 28° E	5.8	3.6	1.9	不揃	平安時代後期	
SB29	3×2	N 20° E	5.7	3.0	1.9	1.5	平安時代前期	
SB31	3×－	N 28° E	3.3	－	1.1	－	平安時代前期	
SA32	3	N 28° E	3.0	－	1.0	－	平安時代前期	
SB37	4×2	N 43° W	7.6	4.0	1.9	2.0	平安時代前期	
SB38	3×2	N 45° W	5.1	4.0	1.7	2.0	平安時代前期	
SA48	3	E 20° S	3.3	－	1.1	－	時期不明	

第2表　掘立柱建物等一覧表

No.	登録NO.	種別器種	出土位置遺構	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	009－04	土師器 高杯	K3 pit1	残高 4.8	ナデ・シボリ→ミガキ→透かし	やや粗	並	淡黄	20%	
2	009－05	土師器 高杯	J3 SA32	脚径12.2 残高 8.7	ナデ・シボリ→ハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙	10%	
3	006－02	土師器 高杯	L7 SK44	口径20.0 残高 8.3	ナデ→ハケメ→螺旋暗文	やや密	並	橙	25%	
4	007－05	須恵器 杯	F3 SK30	口径11.8 器高 2.7	ロクロナデ	やや密	並	灰	15%	
5	007－03	土師器 皿	F3 SK30	口径18.6 器高 2.0	ヨコナデ→ナデ	やや密	並	橙	20%	
6	007－04	土師器 皿	F3 SK30	口径15.8 器高 2.3	ヨコナデ→ナデ	やや密	並	橙	15%	
7	007－01	土師器 甕	F3 SK30	口径15.9 残高 5.5	ヨコナデ→ハケメ	やや粗	並	橙	30%	
8	007－02	土師器 甕	F3 SK30	口径18.9 残高 3.5	ヨコナデ→ハケメ	やや粗	並	浅黄橙	15%	
9	011－01	土師器 甕	F3 SK30	口径26.0 残高 6.0	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	やや粗	並	淡橙～	20%	
10	014－01	土師器 甑	F3 SK30	口径26.7 器高26.5	ケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	並	淡黄橙～	40%	
11	013－01	土師器 竈	F3 SK30	上端24.0 残高22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	並	淡橙～	60%	底部・鍔を欠く
12	005－01	須恵器 短頸壺	K5 SD40	口径9.6～12.5 器高12.3	ナデ→ロクロナデ→タタキ	やや密	良好	灰白	90%	口縁楕円にひずむ
13	006－03	土師器 甕	I6 SD40	口径12.0 残高 4.5	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	やや密	並	浅橙	25%	
14	006－01	土師器 長胴甕	J5 SD40	口径34.0 残高 7.7	ヨコナデ→ハケメ	やや粗	並	浅黄橙	15%	
15	005－02	土師器 杯	D6 SK22	口径16.0 残高 3.2	ナデ→ヨコナデ→オサエ後ナデ	やや密	並	橙	15%	
16	005－04	製塩土器	D6 SK22	底径15.8 器高 3.8	ナデ→オサエ後ナデ	粗	並	橙	15%	
17	005－05	製塩土器	D6 SK22	底径19.2 器高 4.8	ナデ→オサエ後ナデ	粗	並	橙	40%	
18	005－03	製塩土器	D6 SK22	口径19.0 器高 5.2	ナデ→オサエ後ナデ	粗	並	橙	15%	
19	002－06	緑釉陶器	H3 SB29	残長5.7 厚 0.6	ロクロナデ	密	良好	黄灰 釉:オリーブ黄	細片	瓶類体部片
20	008－04	ロクロ土師器 小皿	G3 SB29	口径10.2 器高 2.0	ロクロナデ→糸切り	やや粗	並	灰白	60%	
21	008－05	ロクロ土師器 小皿	H3 SB29	口径 9.1 器高 1.6	ロクロナデ→糸切り	やや粗	並	灰白	70%	
22	002－05	緑釉陶器	F2 SB24	残長 3.5 厚 0.8	調整不明瞭	密	良好	灰白 釉:淡黄緑	細片	
23	010－01	灰釉陶器 長頸壺	D7 SA23	台径 7.0 残高11.2	ロクロナデ→ロクロケズリ→高台貼付時ナデ	やや密	並	淡黄～灰白	90%	
24	009－03	土師器 甕	E6 SB25	口径20.0 残高 3.8	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	やや密	並	にぶい黄橙	15%	
25	009－02	土師器 甕	E6 SB25	口径15.4 残高 7.4	調整不明瞭	やや密	並	にぶい黄橙	25%	＊8
26	009－01	土師器 長胴甕	E6 SB25	口径24.0 残高 7.9	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	やや密	並	にぶい橙	25%	＊1
27	010－02	石製品 砥石	J3 SA48	残長3.9 幅 2.0				暗灰		堆積岩製か？
28	002－04	陶器 椀	H2 SB28	台径 7.3 残高 2.1	ロクロナデ→糸切り→高台貼付時ナデ	やや密	良好	灰白	25%	転用硯
29	001－07	土師器 皿	G3 SK10	口径14.2 器高 4.0	オサエ後ナデ	粗	並	淡黄	25%	＊18
30	002－01	土師器 甕	G3 SK10	口径15.0 残高 5.3	ヨコナデ→ナデ	粗	並	にぶい橙	25%	＊6
31	001－05	陶器 椀	G3 SK10	口径17.7 残高 3.8	ロクロナデ	やや密	良好	灰白	口縁 15	＊3＋＊11＋＊8
32	001－06	ロクロ土師器 椀	G3 SK10	口径18.5 残高 4.9	ナデ→ヨコナデ	やや粗	並	橙～褐	口縁 10	＊20
33	004－02	土師器 皿	K5 SK15	口径11.6 器高 2.5	ナデ→オサエ後ナデ	粗	良好	にぶい黄橙	完形	＊1
34	004－03	土師器 皿	K5 SK15	口径11.7 器高 2.5	ナデ→オサエ後ナデ	やや粗	良好	浅黄橙	完形	＊2
35	004－04	土師器 皿	K5 SK15	口径12.0 器高 2.5	ナデ→オサエ後ナデ	やや粗	良好	浅黄橙	完形	＊3
36	008－02	黒色土器 椀	F5 pit18	口径14.8 器高 3.3	ナデ→オサエ後ナデ	やや密	並	浅黄橙～暗褐	25%	
37	011－04	ロクロ土師器	H3 包含層	口径15.4 器高 4.0	ロクロナデ→糸切り	やや粗	並	淡黄	75%	
38	002－03	陶器 椀	H2 pit25	口径15.8 器高 5.6 台径 7.7	ロクロナデ→糸切り→高台貼付時ナデ	やや密	良好	灰白	60%	転用硯
38	010－04	製塩土器	B3 pit 6	底径15.8 残高 5.2	ナデ	やや粗	並	橙	20%	
40	012－01	製塩土器	D2 包含層	口径14.4 器高 5.2	オサエ後ナデ	粗	並	にぶい橙	10%	
41	006－04	ロクロ土師器 小皿	K7 土坑51	口径 9.8 器高 1.9	ロクロナデ→糸切り	やや粗	並	浅黄橙		口縁外面に朱付着
42	012－02	土師器 杯	I7 包含層	残存長 8.8	ナデ	密	並	橙	底部片	内:スス付着 外:ヘラ記号
43	011－02	須恵器 ミニチュア短頸壺	D4 包含層	口径 5.7 残高 2.4	ロクロナデ	やや密	並	暗オリーブ灰	20%	
44	012－04	緑釉陶器	H2 包含層	残存長 5.4	ロクロナデ	密	並	灰オリーブ 釉:オリーブ黄	体部片	
45	012－05	緑釉陶器	F2 包含層	残存長 3.0	調整不明瞭	密	並	浅黄 釉:暗オリーブ	口縁片	釉剥離著しい
46	012－03	緑釉陶器	H2 包含層	台径11.4 残高 3.3	ロクロナデ	密	並	灰白 釉:オリーブ黄	10%	
47	011－03	土師器 長胴甕	G2 包含層	口径39.4 残高 7.2	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	やや密	並	淡黄	25%	
No.	登録NO.	種別	出土位置	計測値（cm）		胎土	焼成	色調	残存度	備考
48	012－07	土錘	F5 包含層	長 5.7 幅 1.1 重さ5.56g		密	並	浅黄橙	完形	孔径 4 mm
49	012－08	土錘	D4 包含層	長 4.1 幅 1.い2 重さ5.03g		密	並	灰白	完形	孔径 4 mm
50	012－06	土錘	包含層	長 4.4 幅 1.4 重さ6.96g		密	並	淡黄	完形	孔径 5 mm

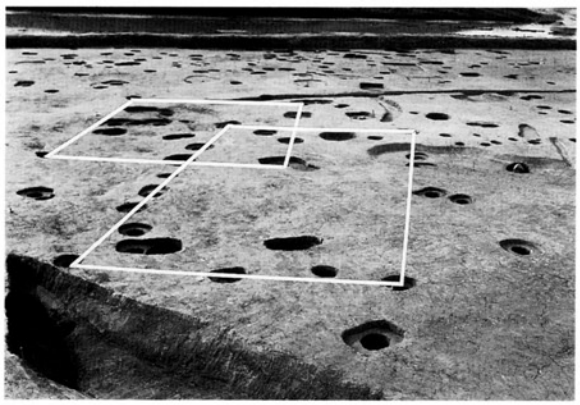
第3表　出土遺物観察表

上層　調査区全景（南から）

下層　調査区全景（南から）

SK30（北から）

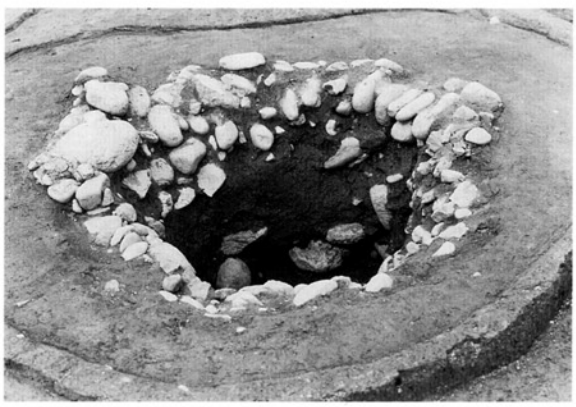
SD40（北東から）



SB37・38（東から）

SK10（南から）

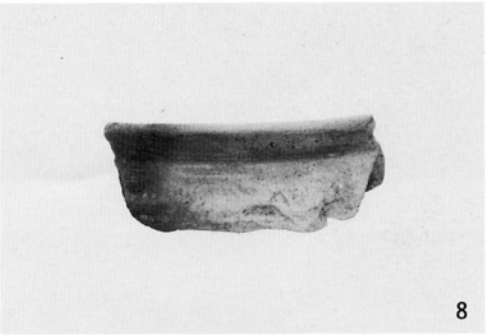
SK15（西から）

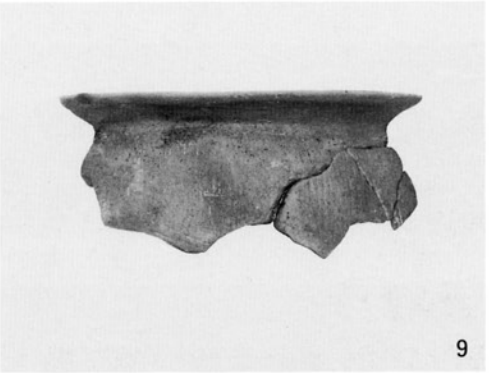


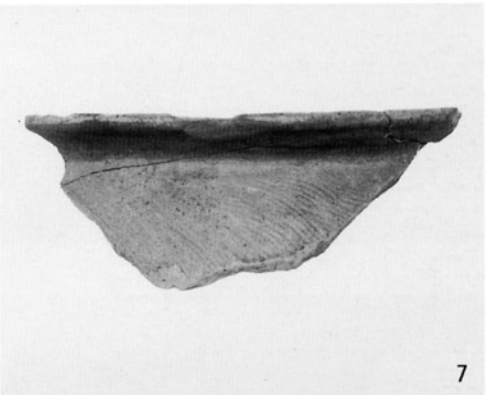
SE16（南から）

SK13（南から）

SK18（南から）

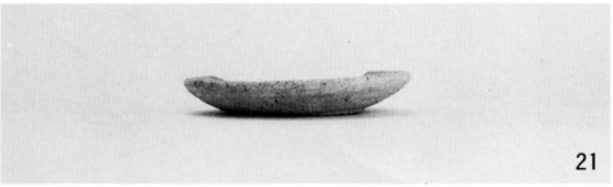


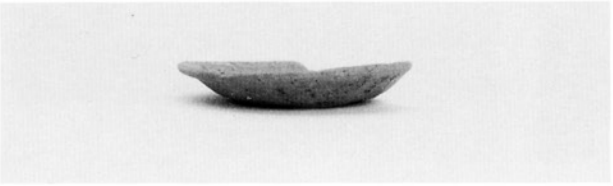


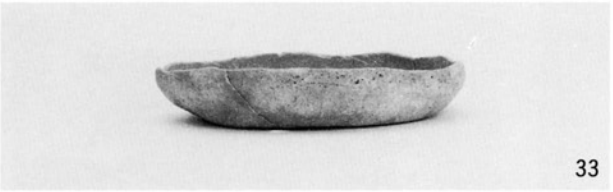


出土遺物(1)（１：３　10・11のみ１：４）

ＰＬ４


21

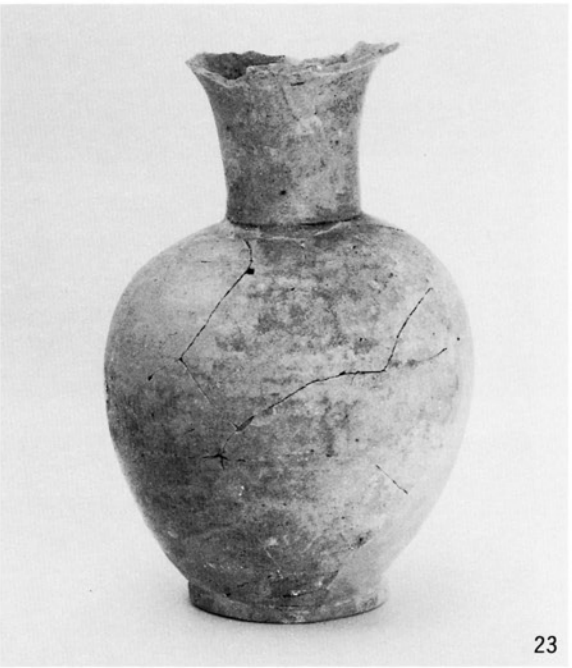



33

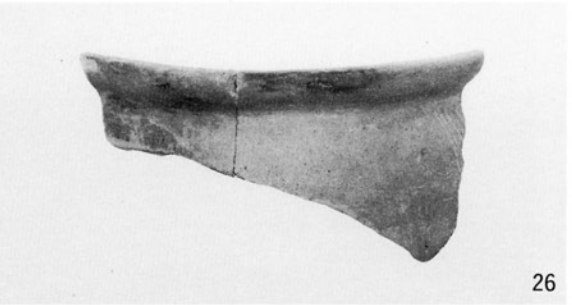
34

35

37

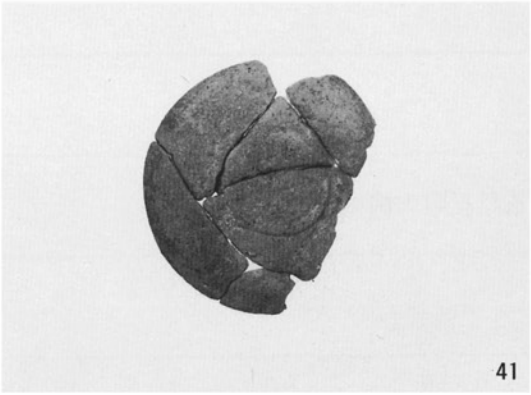

23

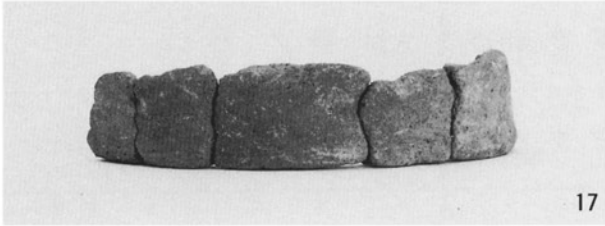
25

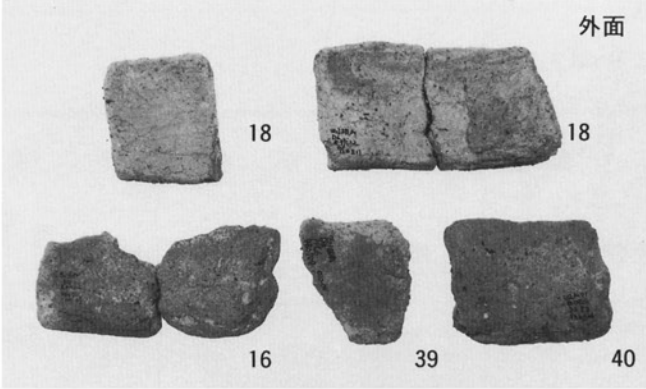

26

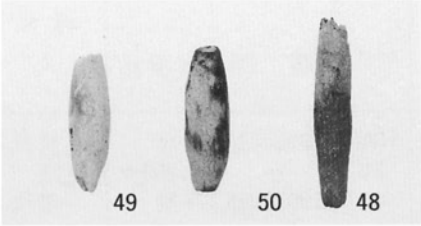
47

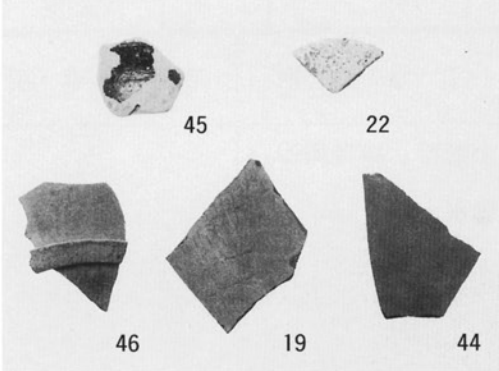
出土遺物(2)（１：３）

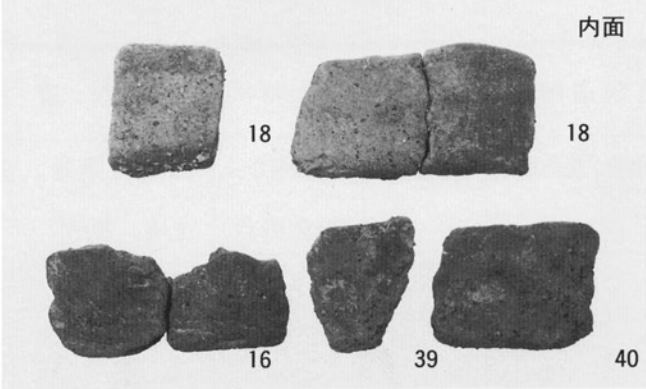












出土遺物(3)（1 ： 3　43・49・50・48のみ原寸）

報告書抄録

ふりがな	よこちにしのがいといせきはっくつちょうさほうこく
書名	横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告　－三重県松阪市横地町－
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	194
編著者名	大川　操
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	㊡515－0325　三重県多気郡明和町竹川 503　☎0596－52－1732
発行年月日	1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積m²	調査原因
よこちにしのがいと 横地西ノ垣内遺跡	みえけんまつさかしよこちちょうあざにしのがいと 三重県松阪市横地町字西ノ垣内	24204	659	34° 31′ 51″	136° 35′ 08″	19980625 ～ 19980925	上層 1,200m² 下層 1,200 m²	県営ほ場整備事業 （漕代地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横地西ノ垣内遺跡	集落跡	奈良時代～鎌倉時代	掘立柱建物、溝、土坑、井戸	土師器、緑釉陶器、製塩土器	

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告
横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告
－三重県松阪市横地町－

１９９９年3月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲第一プリント社